

研究主題

書くことのよさを味わえる指導法の工夫

各分科会の実践

低学年分科会

低学年にとっての「書くことのよさ」

アンケートの結果から、子供たちは、「自分の考えが書けたとき」や「読んだ人にほめられたとき」に書くことのよさを味わっていると分かった。そこで低学年分科会では、「書くことのよさ」について、

- ・自分の考えを表現できること
- ・書いたことを他者に評価してもらえること

と定義し、それらを味わわせるための手立てを考えた。

【研究主題に迫るための手立て】

1 自分の考えを表現できること

これまで、自分の考えを書く際に、「教師がモデル文を示し、それをもとに書く」「ワークシートの枠の中に書く」「ノートに自分の考えを書く」など様々な表現方法を学んできた。

本単元では、これまでの学習を生かし、ずかんをつくる際に様々な書き方を紹介し、その中から児童自身が自分の学びを調整し、表現方法を選べるようにする。

- ・資料（本）を読み取りの難易度を基にレベル別に分類する。児童が自分の能力に応じて資料を選べるようにする。
- ・ワークシートを複数用意する。文章を書く枠の自由度を変えたワークシートを複数用意し、児童が自分の能力に応じて資料を選べるようにする。

自分で選ぶことが難しい児童には、教師が適切に関わり、「自分の力で書けた」という気持ちを引き出していきたい。

2 書いたことを他者に評価してもらうこと

低学年では、やはり書いたものをだれかに読んでもらい、評価（賞賛）をもらうことで「書いてよかった」「まただれかに読んでもらいたい」という意欲を引き出すことができると考えている。

（1）相手意識・目的意識をもたせる

「たくさんの自動車について知りたい」という思いをかなえるために、「じどうしゃずかんをつくろう」という学習活動を設定する。読む相手は、同じ1年生の友達である。友達が読んで分かりやすいように書けるよう指導する。

（2）デジタル図鑑にまとめる

児童が作成した図鑑（画用紙）は、写真を撮りデジタル上で1つにまとめる。デジタル化することで、同時に多くの児童が図鑑を見ることができ、保護者にも見てもらうことができる。他者に見てもらい、コメントや

いいねをもらえることで書いた達成感を味わうことができると考える。

中学年分科会

中学年分科会では、書くことのよさのキーワードを「達成感」とし、書くことで達成感を味わうことができる児童の育成を目指す。本単元で扱う『作ろう！「ショートショート」』を通して得られる達成感には以下のものがあると考ええる。

- ① たくさんの文字数を書くことができた。
- ② 物語を書けた。
- ③ おもしろい物語を作ることができた。
- ④ 読んだ人が笑ったり、感心したりしてくれた。

この中で中学年分科会が目指したい児童の姿は、「内容の達成感を味わうことができる児童」である。
上記の姿を目指すために以下の手立てを立てた。

【研究主題に迫るための手立て】

①相手意識・目的意識

「読んだ人が笑ったり、感心したりしてくれた」という達成感を感じる時に重要になることが、相手からの反応である。その相手を3年生にした。本単元では、書いたものを3年生に見せて感想をもらおうということを事前に伝え、3年生が楽しめるショートショートを書くことを目的とした。また、クラス全員の作品をまとめた作品集を作成することを伝え、形の達成感も味わうことができるようにした。

②バディシステムの構築

単元を通してバディでの話し合い活動を取り入れた。事前に教員がショートショートを書いた際に悩んだ点は【①テーマ決め②どのような構成にするか③結末をどうするか】である。これらは一人で考えるよりも他の人と意見を交流しながら進めることで思考が広がり、楽しみながら活動ができると考えた。そこで、バディを作り単元を通して同じバディで活動させることにした。グループではなく2人組にすることで安心感が生まれ、気兼ねなく意見を伝え合えること、また書くことが苦手な一人では書き出せない児童への手助けとなることをねらいとしている。目の前にいる自分の「バディ」となる相手だけを見つめ、互いに高め合っていこうという目的をもたせる。

③ショートショートならではの文章構成の理解

ショートショートにおいて重要になるのが、「印象的な結末」である。初めて書くショートショート作品作りに取り組むにあたり、全ての児童がある程度の「落ち」をつけることができるように、ショートショートならではの「落ち」を理解させるための手立てを立てた。その一つが型の統一である。落ちが付け易く、書くことが安易な「バッドエンド型」に絞って書かせることで、どの児童も書くことができるようにした。二つ目が、事前にバッドエンド型のショートショート作品を読み、その構成や結末の面白さを共有して掲示することである。型に合った作品を児童に読ませることで、滑稽や可笑しいという意味だけではなく、驚きや意外性なども「面白い」と言えることに気づかせた。また、結末の作り方や全体の構成についての理解につなげ、目指す姿を明確にした。実際に児童が作品作りをする際に掲示を参考にすることもできると考えた。

④興味関心を惹くためのモデル文

事前に中学年分科会の教員4名が作ったショートショートを見せた。そうすることで児童にゴールの見通しをもたせるだけでなく、教員自身も評価を意識しながら指導にあたることができた。また、題名からどんな内容なのか想像したり、どの教員が書いた作品なのか考えたりすることで、児童の興味を引き、自分たちも作りたいと思わせる手立てとした。

高学年分科会

高学年分科会では、書いたことで喜んでもらった経験や書くことで考えがまとまった経験、伝えたいことを伝えられたという達成感により、書くことのよさを味わえる指導を検討している。4月に学力向上部が提示した研究の内容及び方法、

- (1) 児童へのアンケートを全校で行い実態を把握しその変容を見取る
- (2) 自己決定する場面を設定する
- (3) 目指す児童像を共有し、つけたい力を明確にしていく
- (4) 「書くことのよさ」を味わうための手立て
 - ①相手意識
 - ②書く必然性・目的意識
 - ③評価（めあてと評価の一体化）
- (5) 日常活動で積極的に「書くこと」や「語彙を増やす」ための工夫を行う
と照らし合わせて以下の手だてを立てた。

【研究主題に迫るための手立て】

目的・相手意識の設定（4）①②

本単元ではパンフレットを児童が書くが、デジタル化されたものが多い世の中でパンフレットを読む機会は多くない。そのため、パンフレットを作る必要性や有用性を感じにくい。しかし、パンフレットの良いところは、情報量が多いこと、内容がまとまっていて相手に伝わりやすいことである。この良さを児童が感じられるようパンフレットを提示したい。

また今回は、「中川小学校の最高学年として下級生の学校生活をよりよくする」という目的意識、「自分が知っていることをプロの小学生として知識や経験の少ない下級生に伝える」という相手意識をもたせることで、パンフレットを書くことに主体的に取り組めるよう指導する。

書きたいことを自分で選択する（2）（4）②

普段の授業で書きたいことや伝えたいことがうまく決まらずにそこでつまづいてしまう児童がいる。書きたいことを選択できるようにすることで、書くことが決められない児童も書き始められると考える。また、下級生から集めた「6年生に聞きたいこと」を提示することで、最高学年として自分より経験や知識が少ない下級生に教えてあげたいという意欲を引き立たせたり内容を決める際の参考になったりする効果もあると考えられる。

パンフレットのモデル提示（3）

本単元では、どのような書き方が適切で、どのような書き方が不適切なのかと考えさせるのではなく、自分で選択した内容、意図に応じた表現の工夫をモデル文から見つけさせたい。説明する内容や伝える相手によってよ

り適切な表現の工夫を活用させていく。そのためにたくさんの種類のパンフレットを用意し、その中から表現の工夫を見つけられるよう指導していく。

コラムカード、枠（ワークシート）の選択（２）

また、児童に思うままに無制限にパンフレットを作らせたとき、構成の段階でつまずくことが考えられる。あらかじめコラムの形をしたカードを用意しておくことで構成づくりの際の一助にしていく。さらに新聞づくりをした際に、マスが無いと書くことが難しいと感じた児童もいたため、白紙のものと普段使用している 5 mm 方眼が入った原稿を準備しておき一人一人に合った個別最適な指導を行えるようにする。

児童の書く意欲を高める（３）

児童に「やってみたい」「ちょっとやってみようかな」「下級生のために頑張りたいな」という意欲をもたせるために、日常生活の中で児童を「プロの小学生」と呼ぶようにする。小学校生活 6 年目、下級生に自分たちだけが知っていること、経験してきたことをお世話になった中川小学校のためにプロとして教える、という意識づけをさせることで「やってみたい」という意欲を低下させることなく活動に取り組めると考える。

下級生や先生方からのフィードバック（４）③

児童が自分で書いたものがしっかり伝わり、喜びの声をもらうことで「書いてよかった」「自分たちでもできた」「最高学年として中川小学校のために頑張ることができた」と感じることができる。そのようなことを通して書くことのよさを実感させていき、「また書きたい」「他のものも書いてみたい」と主体的に書くことに取り組む児童が育っていくと考える。

日常生活での工夫（５）

日常生活で積極的に文章を書かせるために、朝の会の際「ニュース見つけた」という、日直が新聞から気になったニュースをワークシートに書き、発表する活動を行っている。また、基礎基本となる漢字練習を丁寧に行うこと、辞書を一人一冊持ってこさせ、自発的に言葉の意味を調べさせることを通して語彙を増やさせていく。辞書を引くことで意味・用法・用例を一度に見渡すことができ、調べたい語のまわりにある語の意味が目に入ることから、ほかの言葉や表現を知るきっかけにもなると考える。

専科分科会

専科分科会では、手段としての「書く」ことの有効性に焦点をあて研究してきた。「書く」活動がどのように日々の授業で生きてくるかを昨年度の校内研究から検討している。

本年度は、体育科保健分野での学びを促進するために「書く」ことの有効性を研究した。保健の学習で育てたい資質・能力の育成につなげていくために子どもの「意欲」を中心に「書く」活動をどのように取り入れるのか、手立てを計画した。

【研究主題に迫るための手立て】

専科分科会では、「書く」ことを通してそれぞれの教科の育てたい資質・能力の育成を目指し研究をしてきた。校内研究を進めていくうえで、以下 3 つのポイントを意識した。

○「書く」活動で授業の学びを整理する。

- 「書く」活動を通して、教科学習の意欲を高める。
- 学級における他教科の「書く」活動を活かす。

本授業だけでは「書く」活動で授業の学びを整理する。」「書く」活動を通して、教科学習の意欲を高める。」児童の姿があったかどうかは判断が難しい。アンケート調査や、今後の児童との関わりの中で本単元の手立ての有効性が明らかになる。

校内研究テーマ「書くことのよさ」については、「ほけんだより」を書くことで

- 「書く」活動で授業の学びを整理できた時の納得感(腑に落ちる)
- 「こどもほけんだより」が完成、掲示した時の達成感
- 1,2年生に配布したこどもほけんだより」への感想をもらった時の肯定感を子どもが感じられる授業を計画した。

令和6年研究 成果と課題

児童

○成果

- ・「書くこと」が好きになった児童が増えた。
- ・「書くこと」に対して、抵抗感が減り、主体的に書く活動に取り組むことができるようになった。
- ・「書くこと」により、相手に自分の思いや考えを伝える良さがわかった。

○課題

- ・表現力を高め、長い文章を書くことができるようにする。
- ・事実と考えを明確にし、説得力のある文章の構成を考えることができるようにする。

教師

○成果

- ・「書くこと」の指導法に自信をもつことができるようになった。
- ・「書くこと」の指導に必要な知識を得ることができた。

○課題

- ・指導の系統性を明らかにした指導が必要である。
- ・「書くこと」と「考えること」の関連性をさらに研究を深めたい。